



「私たちの名前は神の国に刻まれている」

2024年7月28日

にっぽんせいこうかいほちのへせい きょうかい
日本聖公会八戸聖ルカ教会

かんりぼくし しきい こしやま てつや
管理牧師 司祭 ステパノ 越山 哲也

平和の祭典としてのパリオリンピックが開幕しました。オリンピックの開会式に必ず登場させなければならないものは「鳩」だそうです。オリンピック憲章にも定められており、ソウルオリンピックまでは実際に本物の鳩が登場していましたが聖火台に鳩が巻き込まれてしまった出来事以降は、鳩をモチーフにした演出がなされるようになったと先日朝の情報番組で知りました。鳩は平和のシンボルです。オリンピックも平和の祭典で私もそれなりに会期中はテレビで鑑賞するのですが、オリンピックを巡っての様々な利権がからむ不祥事などを知ると複雑な思いもあります。

アメリカ大統領選挙の話題が多くなり、パレスチナガザで、市民が今なお殺されている現実の報道がされなくなっています。

7月24日の岩手日報の論壇「交差点」に「ガザの詩人」というコラムに心に留まりました。一部抜粋して紹介します。

ガザの詩人、作家である、リファト・アルアライールについての記事を読み、心引かれた。イスラエル占領下のガザ生まれ。2007年からは大学で、世界文学と創作を教えた。「We Wre Not Numbers (わたしたちは数ではない)」というプロジェクト協同設立者で、若い作家の精神的支柱だったという。死んで、数字としてしか語られない人々の生と死を人間の「物語」として書き表し、語り継ぐ。ガザで起きていることを英語の詩で表現すれば、翻訳されて、世界の人々とつながっていける。若ものたちは、そこに光を見いだしていた。ところがそれゆえに彼自身は標的となり、昨年12月6日、イスラエル軍の空爆で死亡した。遺言としてSNSに載せた詩「If I must die(わたしが死ななければならないのなら)」は、彼の思いとともに、今世界に広がっている。

ガザでは、自分や子どもが殺されても身元がわかるように、足に名前を書く親もいるという。それをほうふつとさせる詩「おなまえ かいて」の中にこんな言葉があった。

「あしにおなまえかいて ママ すうじは ぜったいにかかないで あたしは ばんごうになりたくない」。ガザの若者の執筆活動を支援してきた女性、ゼイナ・アッザームの詩。人間の物語には、大きな力がある。—引用はここまで—

これまでの歴史の中で起きてきた戦争、大量殺戮(ジェノサイド)、自然災害による犠牲者は「数(ばんごう)」で発表され、私たちも「犠牲者〇〇人」のために祈りましょうとって代祷を献げます。一人一人に名前があり、人生があります。東日本大震災の時も「3・11」という表現はなるべく使わないようにしましょう、巨大な津波によって破壊された建物や内部にあったすべてが「瓦礫と化した」のは事実だが、それらはかつては大切に扱われていたものであるから「瓦礫」という言葉もなるべく使わないように意識していました。山内宏泰さん(気仙沼リアス・アーク美術館館長)は震災後、メディアで繰り返される瓦礫という言葉に違和感を覚え、おびたしい多種多様な物体を「被災物」と名付けました。「私たちの国籍は天にある」(フィリピ 3:20)と聖書にあります。私たちは数ではない。一人一人に神さまから与えられたかけがえのない命、そして名前があることを1年の中で平和を強く思う8月に深く深く覚えたいと思います。

